

巻頭言

科学の心と現場を結びつける縦の線

「ダイヤモンドを磨くには、ダイヤモンドが使われる。人は人によって磨かれる」

時は SASJ 設立 2 年前、1993 年 9 月京都鴨川のほとり、KKR くに荘[1]にて、行われた実用電子分光法講座[2]。その時以来、皆勤を続けている。

当時、表面分析の教科書や文献で目にした著名な方々と飲みながら、夜中まで話ができるというのは、若輩者だった私には、驚きであり、楽しみであった。表面分析に関して多くを学び、そして、なにより、「所詮人生暇つぶし」など人生の機微も教えていただいた。特に、材料別分科会、データベース委員会、講演委員会などの活動を通して、様々な分野でそれぞれの技術と知識、見識を持った「工（たくみ）」とも言えるユニークな方々に鍛えられた。この場をお借りして感謝したい。そして、いよいよ、これまで育てていただいた SASJ に恩返しをする時が来たと覚悟を決めた。

SASJ の目的は、「表面分析法に関心を持つ研究者及び技術者の交流を図るとともに、表面分析法の標準化、信頼性の向上及び表面分析法に関わる知的資産の共有を目指す」ことであり、その活動は、以下の 3 つを主なものとしている。

- 「1. 実用を志向した表面分析・評価に関する研究情報を発信・交換する拠点となるための活動」
- 「2. 表面分析に関連する国際協力プロジェクトや国内プロジェクトの推進のための活動」
- 「3. 表面分析に関する知識・理解を深めるための研修活動」

これらに基づいて、研究会での発表やナイトセッションなど自由でサロンのような議論の場から、実用表面分析の本来あるべき標準化とその方向性を探ってきた。そして、議論する中で多くの方々とふれあうことができた。SASJ の特徴は、表面分析という共通の話題を通して、業種を超えて、わかり合い、協力し合い、支え合えるところにある。これまで歴代会長が創り上げた良き伝統を継承するとともにさらに新しいことへと挑戦を開始したい。

ToF-SIMS グループとの連携、EPMA や電子顕微鏡、イオンビームなどを使っての表面分析、その他、表面分析にかかわる分析手法など電子分光だけでなく、広い意味での表面分析に関する討論の場、若手を取り込む場、試料作製など職人技も含めた多くの専門分野にわたるディスカッションできる場を作り、日本がアジアの中心的活動拠点となるべく、取り組んで行きたいと考えている。

前田孝矩先生（東北大学工学部）の言に「工の上の一本棒は天の自然現象、下は地の上の人と社会を表す。それを結びつけるのが縦の棒。人の社会のために自然現象の原理原則を使って有益な仕事をしていくのが「工」の立場である」とある[3]。すなわち、上下の横線はそれぞれ、科学と現場であり、それを結びつける縦の線が SASJ と言えるのではないだろうか。

あくまでも実用にこだわり、しかし、そこには、科学的精神を持って実用的な問題に取り組み、科学的アプローチで整理し、見通しをつける、そんな気質のコミュニティ作りを目指していきたい。科学的精神と職人的な感覚を持った工（たくみ）の集まり、それが SASJ である。私もまた、上の世代とこれからの世代とをつなぐ縦の線として、上の横の線と下の横の線とのバランスを保てるよう真ん中でその役割を担っていきたいと考えている。

第 4 代会長 TDK 株式会社 柳内克昭

参考文献

- [1] 吉原一紘, “一通の開催通知”, *J. Surf. Anal.* **3**, No. 1 (1997).
- [2] 実用電子分光法講座, *J. Surf. Anal.* **8**, No.3 (2002).
- [3] 西澤潤一著 「独創は闘いにあり」新潮文庫 (1989).